

茶わん祭りに臨時電車が運行(佐野町)



加賀佐野駅に停車中の能美電

狭野八幡神社で九谷茶わん祭が行われた際に
は、臨時電車が運行され、超満員の乗客でした。
特に珍しい女相撲があった日には、駅から相撲
会場まで行列になっていました。町内には、眼
科医院があり多くの患者が能美電を利用して通
院していました。



能美電の一生 登場から廃線まで



能美地域周辺図 『石川県能美郡誌』大正12年より抜粋

1. 能美地域の今昔

能美地域の位置関係

私たちが住んでいる能美市は加賀平野のほぼ中央部にあり、鶴来の手取川対岸を起点にして、東から西へと日本海に向かって流れる手取川の左岸に位置します。南側は標高200m～500mの尾根に繋がる丘陵地で、稜線を西へ下ると小松の梯川右岸の扇状地になり、小杉町、五間堂町、山口町が小松市との境界線になっています。

白山市鶴来から海岸まで東西約20Km、手取川と梯川間の南北約4.2Kmで面積は約84Km²です。現在の能美市は2005年(平成17年)に旧辰口町、旧寺井町、旧根上町の3町が合併してできたのですが、その前は国府村、山上村、久常村、寺井野村、粟生村、吉田村、根上村の7村が混在していました。それぞれの集落名称は、現在とほとんど変わっていません。

能美市の人口推移表(10ページ)から能美電が開通する以前 1920年(大正9年)の人口は22,832名で、2010年(平成23年)の48,680人に比べて半分以下の人数でした。

大正初期には能美市全域に電灯

1912年(大正元年)には能美地域全体で電灯がつき、電動機も使えるようになりました。産業に必要な動力を水車に頼らなくてもよくなったので、農業以外の産業も始まつたのですが交通・運搬手段が未発達なため生産量や従業員を増やすことができず、毎年仕事を求めて多くの人が都会へ転出していました。

昭和初期には、農業は米作中心で、鉱業品では銅鉱石や陶石土



水田風景

1930年頃(昭和初期)の一次産業の農業生産品は米がほとんどですが、地味に応じて麦、粟、稗、大豆、小豆、えんどう、そらまめ、ささげ、いんげん、きび、そば、いも等が栽培されていました。

加工用の特用農産物としては茶、実綿、からむし、菜種、ごまなど、果物では柿、柚、梨、栗等。その他に養蚕などもあったのですが、これらの生産額は少なく、米の5%にもならなかったようです。鉱業生産品は鍋谷の銅鉱石や陶土、陶石がありました。

能美電開通まで、人馬中心の運搬

能美地域の産品の販路は近隣の集落でしたが、その運搬手段は手と肩と背中に頼る人力と馬や船でした。馬が通る道路幅は6尺(1.8m)、山道や田圃道は3尺(0.9m)でしたが、運搬量や人の往来が増加するにつれて道路も改修され、運搬手段として荷車や馬車、自転車が使われるようになりました。

1920年(大正9年)当時の山上村(旧辰口町)の例でみると運搬車両台数は、荷車136、荷馬車22、人力車2、自転車176、乗用車2台で、貨物用自動車はまだありませんでした。

工業製品は、陶磁器と絹織物が中心

当時の第二次産業の工業品は、輸出羽二重、生糸、木綿、陶磁器、木材、木工品、菜種油、清酒、瓦、石細工、わら製品でした。

大正14年頃の旧寺井町では工業製品の57.6%が陶磁器で、34.9%が絹織物でした。旧根上町では海岸沿いで水田が少なく、米の他は畑作と漁業、船乗り業、養蚕業、魚類商が生業でした。その他に織物業が着目され、輸出用羽二重の生産が盛んになりました。

町報『ねあがり』(昭和11年根上町役場発行)によると、1889年(明治22年)には織機が366台設置されており、1912年(明治45年)には累計で384台になっていました。

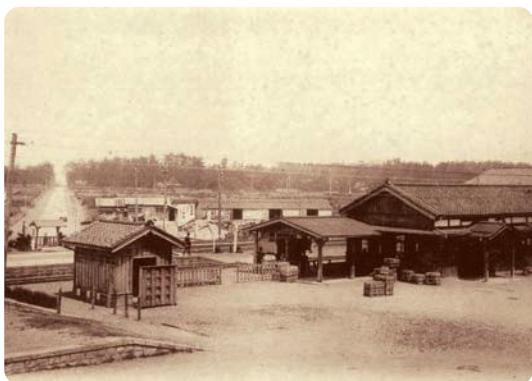
交通・運搬手段の不足が顕在化

地域が発展するには食糧や生活必需品を生産し、それらを流通させる産業がなければなりません。それには交通・運搬手段が大きな役割を持っています。特に工業製品の生産には交通・運搬手段の革新が必要でした。

2. 能美電誕生までの動き

省線(現在のJR線)能美市内通過

今のJR北陸本線は1899年(明治32年)に省線と呼ばれ米原一富山間が開通したのですが、小松駅から田地が多い寺井地区を避けて根上地区を通り、美川駅、松任駅を経て金沢駅を結んでいました。



省線寺井駅前風景

「寺井駅」が根上村に誕生

当時はまだ寺井駅はなく、小松一美川間のどこに駅を開設するかでもめ、1912年(明治45年)に産業が優勢な寺井を駅名にして現在地の根上(旧濁池)に決まりました。

これ待っていたかのように、早速6店の運送店が開業し、1916年(大正5年)には寺井まで10銭の人力車が営業を開始し、1926年(大正15年)までに銀行11店舗と青果物の大丸市場が開店し、宿屋5軒、料亭・床屋・小売店も軒を並べました。

省線寺井駅の開設で明治45年には戸数5戸の濁池が、19年後の昭和5年には70戸の集落になり、乗合自動車も営業を始めるなど、急激に発展しました。

石川電気鉄道石川線(金沢～鶴来)開通



野々市付近を走る石川線

1921年(大正10年)には、能美地域の東端に接する鶴来まで、石川電気鉄道石川線が金沢(新野々市駅)から鶴来まで電車を開通させました。鶴来は白山麓の玄関口で奥地に多くの集落があり、木材、石材、木炭、酒を算出し、金融機関が33行あり、商家は軒を並べ、月に6回市が立ち、近郷近在から客や小商人が入り込み易くなり、小都市として発展していました。

交通不便な能美地域

この石川線鶴来駅と西の省線寺井駅の間の能美地域は米を中心とした農産物、九谷焼、絹織物の県下有数の産地であり、温泉もありました。

しかし、鶴来と省線寺井駅を結ぶ県道が一本しかいため交通や貨物輸送が不便で、産業の成長を妨げていました。

3. 能美電気鉄道設立

鉄道大臣宛に認可申請

この不便を解決し、行商や通勤・通学の足としてだけではなく、観光客の誘致や九谷焼の輸送の利便性を向上させるために、関係者が集まり石川線鶴来駅と省線寺井駅を結ぶ能美電気鉄道設立を計画しました。

能美電気鉄道(株)設立

寺井野村の大地主(50町歩=50ha以上で石川県内で最大)酒井芳を総代に、寺井野村村長で陶器商の石崎蕃、同じく陶器商の井出善太郎、温泉業の田川政明、松崎純、起点になる根上村村長の森喜平、機業家藤岡與次郎らを含む31名が発起人になり、1922年(大正11年)に免許を申請し、翌1923年1月に鉄道大臣の認可を受け、9月に資本金60万円で能美電気鉄道株式会社を設立し線路敷設工事を開始しました。

能美電敷設及び運輸営業免許状

1923年(大正12年)6月20日付で、鉄道大臣大木遠吉より能美電気鉄道株式会社宛に能美郡根上村より同郡山上村へ至る鉄道敷設と運輸営業の免許状が発行されました。

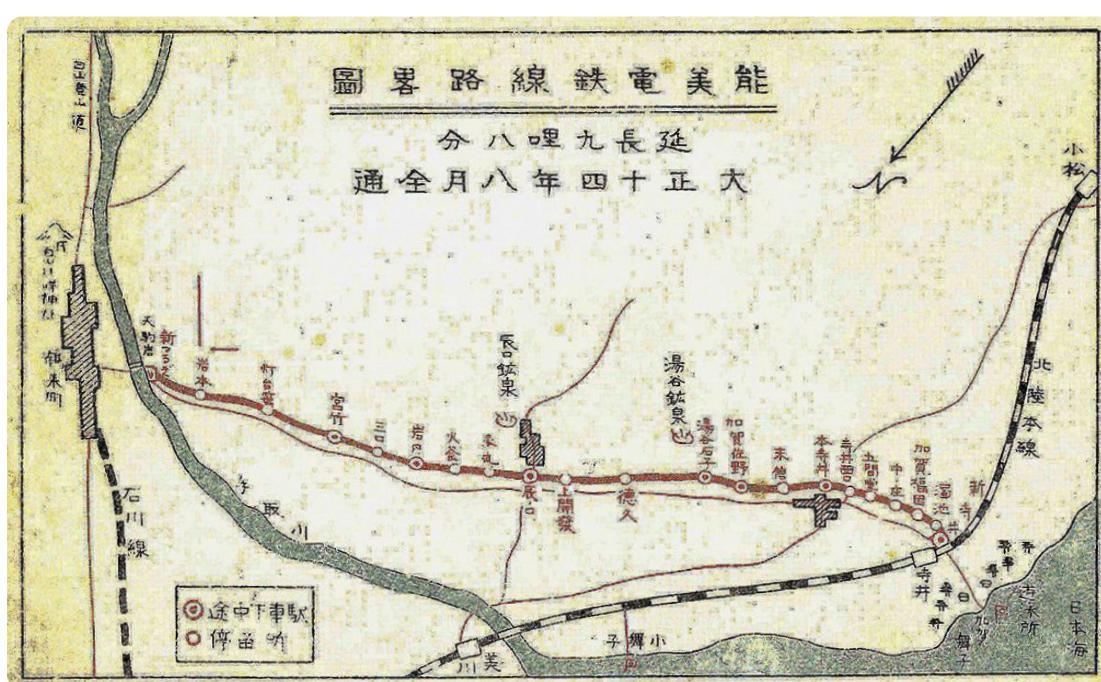
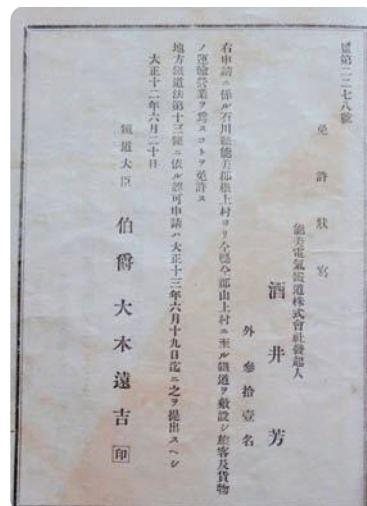
念願の能美電が順次開通

こうして能美電気鉄道は、1925年(大正14年)3月に本寺井(旧寺井町)一辰口(旧辰口町)間を開業、同年6月に辰口一新鶴来間が開業、同年8月に新寺井(旧根上町)一本寺井間が開通し、新寺井から新鶴来まで全線が結ばれました。

開業時には、電車3両(木造車で全長9m乗車定員40人)、貨車5両を新製し、翌年鉄道省から貨車2両を譲り受けて営業を行っていました。



酒井 芳



大正14年8月に全通した能美電の駅名配置図

鉄道開設の祈願書奉納

能美電気鉄道株式会社初代社長酒井芳から白山比咩神社へ鉄道開通への祈願書が奉納されています。

能美電試乗の歌 能美電鉄建設の発起人代者表酒井芳は、開通の喜びを電車に乗って各駅の様子について「能美電試乗の歌」として残しています。(以下は原本より要約抜粋)



新寺井駅



本寺井駅



辰口駅前通り

灯台笹、岩本を過ぎれば新鶴来(天狗山駅)の終点であるが、天狗橋を渡れば鶴来で白山比咩神社があり、祈願成就のお礼参りをしたという大パノラマのような内容の文芸作品となっています。

新寺井駅は駅前に柳家があり、小料理、酒が楽しめる。浜と松林が美しい加賀舞子や根上の松が近い。

出発して間もなく線路は大きく曲がり濁池駅を通過する。根上には機業場が数工場あり500数余の織機があり、500数余の女工がいる。加賀福岡駅には能美産業銀行がある。田園の中を中ノ庄駅、五間堂駅を過ぎれば、寺井西口駅に着く。

本寺井駅は九谷の本場で、大問屋が軒を連ね、商人が数百に満たんとしており、能美北部の商業物資の中核である。

牛島駅は猿田彦を奉る氏神様がある。

加賀佐野駅は白地窯元数戸、絵付問屋が軒をならべ地元商人他国仕入商人が入りみだれている。

石子駅には骨接医者に毎日数百の怪我人が来て町を豊かにしている。湯谷駅には温泉宿2軒、湯女20人。製陶の硬質陶器、煉瓦、九谷窯など産額が多い。

徳久、上開発を過ぎれば辰口駅に着く。

辰口温泉には、温泉宿が軒を並べ四六時浴客が絶えず、100余名の湯女芸妓がいる。

来丸、火釜を過ぎると加賀岩内駅に着く。ここは宮竹用水の喉笛であり右手の山を越えれば七つ滝がある。三口を過ぎると宮竹で、ここには大造り酒屋がある。



酒井芳から祈願書が奉納された白山比咩神社

4. 能美線の路線データ

昭和7年天狗山隧道が完成し、新寺井一鶴来間全線開通



天狗山隋道を通過する能美電



天狗橋完成時

能美線データ

路線距離(営業キロ)：16.7Km(最盛期)、駅数：23(起・終点駅を含む)

軌 間：1067mm、全線単線、全線電化

駅 名：鶴来天狗山、岩本、灯台笹、宮竹、三口、加賀岩内、火釜、来丸、辰口温泉、上開発、徳久、湯谷石子、加賀佐野、末信牛島、本寺井、自動車連絡場、寺井西口、五間堂、中ノ庄、加賀福岡、濁池、新寺井

5. 能美電の役割の終了と廃線



新寺井駅に貼られた能美線廃線のお知らせ掲示板

時代の変遷と共に役割を終えた能美電

酒井芳らの願い通り、能美電は沿線の住民の通勤、通学の足として親しまれ、夏には加賀舞子海水浴場へ秋には遠足の団体を鶴来の山へ、大晦日や元旦は白山さんへ初詣の客を運び、地域の産業を支え、発展に貢献しました。

しかし、能美電の輸送人員の推移は北陸鉄道の資料によると1965年(昭和40年)は1日に6,081人でしたが、1978年(昭和53年)には1日の利用者が804人になってしまいました。

急速な自動車社会により廃線へと

その原因是高度成長により急速に自動車社会が進展したためでした。

利用者が減少すればお客様ゼロの電車も走ることもあり、北鉄では駅の無人化や運賃値上げ、間引き運転などの合理化対策を講じましたが不採算の赤字路線になってしまい、ついに1980年(昭和55年)に55年の生涯を閉じて廃線になりました。



6. 現在の能美電跡



整備された桜健康ロード

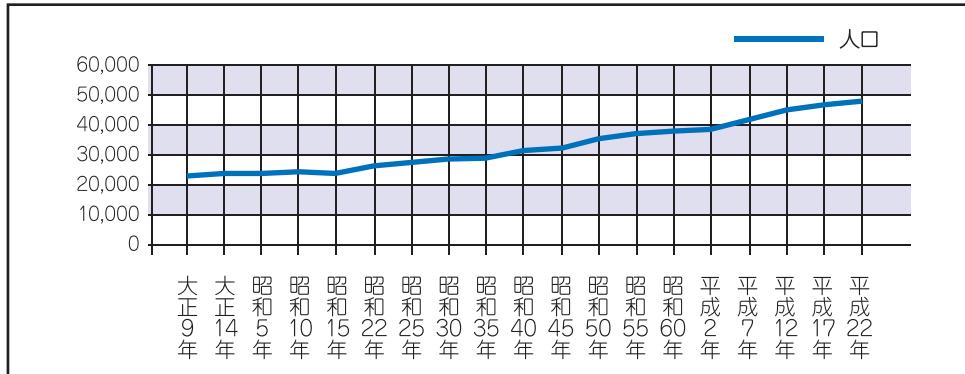
線路跡には、旧町がそれぞれの計画で駅跡にモニュメントを残したり、ポケットパークにし、それらを結ぶ桜並木の遊歩道（健康ロード）や市道に整備されています。

7. 人口変化で見る能美市

下表は能美市の人口推移表ですが、能美電が登場する前の1920年は22,832人でしたが、2010年は48,680人で90年かけて人口が2倍に増加しています。

能美市の人口の推移（単位：人）

大正9年 (1920)	大正14年 (1925)	昭和5年 (1930)	昭和10年 (1935)	昭和15年 (1940)	昭和22年 (1947)	昭和25年 (1950)	昭和30年 (1955)	昭和35年 (1960)	昭和40年 (1965)
22,832	22,409	22,832	24,473	22,832	28,325	29,224	29,107	29,186	31,053
昭和45年 (1970)	昭和50年 (1975)	昭和55年 (1980)	昭和60年 (1985)	平成2年 (1990)	平成7年 (1995)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	平成22年 (2010)	
32,933	35,308	37,253	39,061	32,933	42,033	45,077	47,207	48,680	



能美地域に人が定住した頃の詳細は何人かわかりませんが、1920年までの人口増加速度は平均すれば年間12人程度と推測されます。

工業化していない社会の人口の変化は遅いと思われますが、能美電が登場してから第二次世界大戦や敗戦後の復興景気で工業化が進み、開通から30年後の1955年の人口は29,107人になりました。この時の増加速度は年間223人(0.99%)に上昇しています。

その30年後の1985年は経済の高度成長で好景気が続き、年間平均332人(1.1%)増加して39,061人になりました。合併時の2005年は47,207人で、増加速度は年間407人(1.0%)増です。

直近の2010年は48,680人で、増加速度は年間295人(0.6%)に低下しています。